

福島白河バージョン



ポリフォニックミュージアム



ポリフォニックミュージアム

陸奥賢さん



観光家/コモンズ・デザイナー/社会実験者。  
1978年、大阪・住吉生まれ。堺育ち。フリーター、放送作家&リサーチャー、ライター&エディターなど、さまざまな経験を経て現在へ。2007年に堺を舞台にしたコミュニティ・ツーリズム企画で「SAKAI賞」を受賞。2008～2013年まで、大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会のまち歩き事業「大阪あそ歩」（2012年、観光庁長官表彰受賞）にプロデューサーとして携わり、そのまちに暮らす人自身が楽しむまち歩きを实践。2011年からは、まちづくり、観光、メディア、アートの境界を逍遥しながら「大阪七墓巡り復活プロジェクト」「まわしよみ新聞」「直観読みブックマーカー」「当事者研究スゴロク」「歌垣風呂」「仏笑い」など、独創的なコモンズ・デザイン・プロジェクトを企画・立案・主宰しています。

今回、福島県白河市で高校生とまち歩きを！というオーダーに対して、秋から冬にかけて数度にわけて白河市に滞在。陸奥さんならではの視点で白河市を切り取っていただきました。その陸奥さんのファシリテートで行われたワークショップ「白河まち歩きスゴロクを作ろう！」は、さていかに！？

そして、陸奥さんと出会うことで白河のまちはどのように変化したのでしょうか。



本ノートに収録されているまち歩きフォトスゴロクは陸奥賢さん考案の写真編集遊びツール「フォトスゴロク」を転用したものです。「白河市バージョン」(28～39p)と「福島県バージョン」(40～57p)の2種類が収録されています。



※フォトスゴロクに関しては以下サイトをご参照ください。  
<https://www.facebook.com/photo.sugoroku/>

! ?

## はじめに

あなたの暮らすまちは、どんなまちですか？

このノートは、

まち歩きの人、陸奥賢さんと行った

アートワークショップ「白河まち歩きフォトスゴロクを作ろう！」の記録と、

陸奥さんならではの白河レポート、

陸奥さんによる「まち歩きフォトスゴロク」指南、

そして、あなたのまち歩きのためのスゴロク台紙です。

まちを歩いて気づいた「?!」を誰かと共有することで、それは誰かの「?!」になります。

誰かの「?!」は、あなたの「?!」になります。

そうしてできたスゴロクは、これまで見えていたまちを、少しちがった角度で見せてくれるはず。

このノートを片手に、まち歩きにでかけませんか？



2021.9.23 (木/祝)

白河市歴史民俗資料館で学芸員の内野豊大さんに、白河の近代史・戊辰戦争についてお聞きしました。小峰城歴史館にて歴代藩主について学び、復元された小峰城を見学。

白河は戊辰戦争の激戦地でした。まちのあちこちに戦死者を弔う供養碑があります。陸奥さんの言う他者＝死者と近いまちなのかもありません。



福島県文化財センター「白河館「まほろん」見学。南湖公園を散策。陸奥さん、市役所のみなさん、LMN事務局とでミーティング。陸奥さんとまちを歩いた市役所職員のみなさん。もともとEMANONの高校生とまち歩きができなしかと考えていたのですが、陸奥さんが実践するまち歩きはまさにびったり！「小さな視点から始めるのが面白い」、「まちづくりにも活かしていけるのではないかと」と、楽しいミーティングになりました。



白河では、高校生の多くが、高校を卒業すると進学や就職のためまちを離れてしまいます。彼らに自分の生まれたまち、暮らしたまちが、どんなまちだったのか知ってもらいたい。通り一遍の白河ではなく、「自分の白河」をもってほしい。普段の生活では出会わない大人と出会い、普段の勉強とは異なる方法でまちに接続することで、一人一人の白河、多層的な白河が見えてくるのではないかと。ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員で、本事業の拠点となったコミュニティ・カフェEMANONの代表・青砥和希さんとのそんな対話から、このアートワークショップはスタートしました。そのまちに暮らす人自身が楽しむためのまち歩き。そんなまち歩きを実践する陸奥賢さんに携わっていただき、どうしたら高校生と白河のまちが出会えるのか、ミーティングを重ねました。そのためには、まず白河を知らなければ！アートワークショップは、事業を組み立てる大人自身が白河を知るためのリサーチから始まりました。陸奥さんとまちを歩き、人と出会い、アートワークショップ「白河まち歩きフォトスゴロク」を作ろう！」は次第に形づくられていきました。



2021.9.22 (水)



2021.9.21 (火)

コミュニティ・カフェEMANONで合流。さっそく白河のまちを散策しました。

EMANONは白河市本町にあるカフェ。学校でも家でもない、高校生たちのサーイドプレイスとして活用されています。第1回目の散策には、白河市役所建設部の職員も参加。1000円で食べられるものを探しながら小路を歩いたり、お寺や古い建物をめぐったり。市役所職員の方も「こんなところがあったのか！」と驚いていました。

藤田記念博物館で学芸員の佐川庄司さんに、白河市街の成り立ちについてお聞きしました。

白河市街地の都市計画が立てられたのは400年前！戊辰戦争を経て武家屋敷街は失われましたが、近代に鉄道が武家屋敷跡地に敷設されたこともあり、町人の暮らすエリアは大きな影響を受けませんでした。鉄道や道路が市街地を通らなかつたこと、第二次世界大戦中に空襲の被害がなかつたことなど、様々な要素が積み重なり、白河は江戸時代の城下町の様子を色濃く残すまちになったそうです。



2021.12.4 (土)



2021.11.3 (水/祝) -4 (木)

中山義秀記念文学館で館長の植村美洋さんに、戊辰白河戦争についてお聞きしました。

今回のリサーチでは、白河市内の博物館、資料館、文学館などを訪ね、お話を聞かせていただきました。今、立っているこの土地がどのようにして形づくられてきたのか、何気ない風景の中にどのような歴史が堆積しているのか、ミュージアムを訪ねること、より立体的に見えてきたように思います。そして、それは地域のミュージアムのとても大切な役割なのだと思います。



陸奥さん、ひたすら白河のまちを歩く。



リサーチを通して、白河のまちと出会った陸奥さん。その陸奥さんから、高校生とのまち歩き企画として提案されたのが、「まち歩きフォトスゴロク」でした。



「これから白河のまちを歩いてもらいます。自分が  
気になったもの、こんなみつめました、いうもの、  
スマホで写真にとって送ってください。」

まち歩きに必要なものはスマホのみ。  
参加者たちは上着を着込み、カフェ  
の外に出ました。←一むは右へ、  
ぱーちーむは左へ。



## ワークショップ 白河まち歩き スゴロクを 作ろう！

レポート：藤城光 写真：西間木大



白河のまちは、東北に向かう交通の要所として発展し、  
松平定信が藩主だったことでも知られています。小峰城  
がシンボルとして聳え、まち中の小径は江戸の城下町の  
名残りもあり、さらに昭和のレトロ感のある建物があち  
こちに散在し残っていることから、独特のノスタルジック  
な雰囲気を感じ出しています。そんな小径を歩きながら、  
寂れた建物を「エモい」とスマホでカシャ！猫を見つけて  
キャッキヤしながら追いかけてカシャ！



2021年12月5日、白河、快晴。築90年の  
古民家を改装して作られたコミュニティ・  
カフェ EMANON。ここが、今日のワー  
クショップ「白河まち歩きスゴロクを作ろう！」  
の会場です。



バラバラに歩いているようでいて、小径を  
曲がるとバッタリ会って合流したり、遠くに  
姿が見えたり。ゲームのような感覚も楽しみ  
ながら、またね、と手を振り合います。

カラカラ、と音を立てて EMANON の玄関  
扉が開き、参加者が少しずつ集まりはじめ  
ます。参加者は、市役所職員3名を含む、  
いつも EMANON を利用している高校生から、  
郡山から来た高校生、インターンで白河に  
来たという大学生など10名。

陸奥さんが柔和な口調の大阪弁で話し始め  
ます。「では2チームに分かれてもらい  
ますので、じゃんけんで決めまひよか。  
ぐーぱ！」。かわいい声かけでジャンケン  
が始まりました。途端に小学生のような  
表情になる参加者たち。





1枚ずつ、選んだ理由を話しながら、写真を置いていきます。全部が出揃ったところで、もう一度マップで確認しながら歩くルートの道順に合わせて写真を並べ替え、スゴロクのマスに配置。道順が決定したら糊で写真を貼り付け、写真の横にコメントを入れ、スゴロクの空欄のコマにオリジナルのゲーム性を加え、タイトルを付けたら完成です。



出来上がったスゴロクは、チームによってコメントの書き方も拾い上げられた内容も、全く違っていました。

スゴロクを始める前に、ぐーちーむ、ぱーちーむで交換。別のチームが見ていた世界が目の前に開かれ、違うアプローチで作られた視点に目を丸くする参加者たち。そしてサイコロを振りながら、この日のクライマックスであるスゴロクがスタートしました。



個人的な思い出話というのは、案外面白いものです。個人的なものですから、市販のガイドブックにも歴史の教科書にも出てくることはありませんが、それが投げ込まれた途端に、その場が劇場になっていくようにも感じる時があります。案内人がいないまち歩きだからこそ、徒然のままに発見したことを共有したり、思い出話を語ったり。そうやって風景が一気に物語性を帯びる瞬間を重ねていくことで、まちの中にある面白さは見る側によって開発されていくものなのだ気づいていきます。



あっという間に1時間が経ち、急ぎ足でEMANONに戻ってきた参加者たちは「寒い寒い」と言いながらも皆清々しい表情でした。グループごとにテーブルを囲むように座り、まち歩きスゴロク作りで使う写真を3枚選びます。



白河のマップを囲み、自分たちが歩いた場所を指差しながらお互いの小さな旅の話をはじめました。1時間歩いたのに、ほとんどの人が意外と狭いエリアをぐるぐると回っていたことに驚きます。いっばう一人ぶらりと歩くのが好きだと話していた学生さんは、地図をはみ出して歩いていたことを知り、これまたみんなの驚きに。



「白河」というまちから受け取ったものを、写真を使って表現していく過程からは、自分の嗜好を通して地域そのものが発する語りを感じる力が、それぞれの内側から顔を出してくるのを見るようでもありました。10年後には残らないかもしれない景観や表面には見えない記憶が、歩きや写真、語りを通して個人の中に蓄積されてゆく。個々の価値のありようが可視化され、共有され、互いの視点の交換を通して多くに触れることができる仕組み。それは、その地域にある重層的かつ多様な価値の集合知のようにも見えてきます。

そしてそれは、何に価値を見出すのかの根っこは、個人個人でしかないという、基本にも立ち帰らせてくれると同時に、3枚に絞り込む瞬間、道順を作った瞬間など、個人の視野からグループへの関わりへと変化するにつれての取捨選択は、個から公へと変化していく過程のようでもあり興味深いものでした。

実際に体や手を動かし、自分と他者を介在させながら感覚開拓が為されていく点、また、地域を知る楽しさを体感しながらも、気がつけば主体的に地域への眼差しが変化していくところも、このまち歩きスゴロクの醍醐味でしょう。例えばまちに残る懐古的なものから過去を大事にする地域性の話が出てくるように、開かれる場所と一緒に作るメンバーによっても、開拓される感覚は変わるはず。いろいろな地域・場所・人でまち歩きスゴロクを作ってみたらどんなものが浮かび上がってくるでしょうか。自分の感覚を通して地域に潜む重層性に触れ、集った異なる視座からさらに多面的に物事を捉えていく経験は、参加者はもちろんのこと、地域自体にも思いもよらないさまざまな価値を付加してゆき、人も地域もより豊かで幸せなものにしていくのではないかと、参加者の皆さんの満足そうな表情をみながら思いました。



お地藏さん、お城、自動販売機、何の電話番号かもわからない電話番号。祈祷師。謎の神社&鳥居。謎のミニ博物館。何年たっても変わらないお菓子屋のおばあちゃんの妖怪疑惑。謎の穴。たくさんのミステリーが展開し、あがり競争スゴロクのゲーム性にだんだんみんな前のめりになっていきました。“振り出しに戻る”が仕込まれたスゴロクをしていたチームでは「ここまできて～!?!」「うわ～!!」と嘆声が上がリ、最初のあがりは“あがりに進む”コマからのジャンプによって達成。「そんなあがりかたある～?」と笑う陸奥さん。



# 白河を逍遙しながら

## 観光家・陸奥賢の 白河滞在記録



僕は普段は「観光家」と名乗って活動している。僕らの定義では、観光とは「その人の世界観に光を当てて揺さぶること」だと考えている。「人生観」「恋愛観」「仕事観」といった言葉があるが、「観」というのは、その人の思考や認識、指針、態度、行動を意味する。その人がどのように人生を考えているか？恋愛を捉えているか？仕事をしようとしているか？といったことを表現するときに「観」が使われる。

「観」は、しかし、注意しないと「人生とはこうであるべき」「恋愛はこうでないといけない」「仕事とはそういうもの」というように、ひとりよがり、独善的なものに陥りやすい。対象の、ある側面、ある一面しか見えていない。そこで、その人の想像だにしない、意外な角度から「光」をあてることで、「こういう考え方もあるのか」「そういう風に行動するのか」「そんな認識はなかった」と、対象の新しい側面、新しい一面を発見し、その人の思考や認識、指針、態度、行動を変容させる。よりニュート

ラルになり、よりフラットになり、より自由になっていく。世界観が広がったり、深まったりする。そういう仕掛けや仕組みを作る仕事人ということで僕は「観光家」と名乗っている。

こうした「観光」を発生させるのに、必要不可欠なのが「他者」だ。「他者」こそは、自分と全く違う世界観を持つ存在であり、想定外のものであるから。この「他者」とは哲学概念であり、生きていく人間だけのことは限らない。時には「死者」「異類」「道具」「自然」「神仏」「祖霊」「超越的存在」など、いろんなものが包括されているが、この「他者」と出会うことが、自分の世界観への最大の揺さぶりとなり、最大の「観光」となる。僕は常に、自分にならないもの、想定だにしないものとの出会いを求めているし、「他者」と出会う機会、「他者」と共にいる時間、「他者」について考える空間を作りたいと考えている。

白河でも僕は「他者」との出会いを求めて逍遙した。以下はその記録。



はじめて白河を訪れたのは2021年9月のこと。その後、11月、12月、2022年1月と都合、4回ほど訪れることとなった。それまで何度も仕事や観光などで福島県は訪れているが、訪れるのは浜通りや会津地方が多く、一度として中通りの白河を訪問したことはなかった。

僕は大阪生まれ大阪育ちの人間だが、何の因果か「陸奥」という姓で、これは大阪では非常に珍しい。自分の姓のルーツとなる「陸奥国東北」に対しては物心ついた頃から特別な思いを抱いていた。陸奥家は、聞けば宇和島藩（陸奥家の家紋は宇和島笹といひ、宇和島伊達家の家紋と同じ）の武士の出で、だから先祖は仙台伊達藩と繋がる。「白河の関」を越えれば、そこはまさしく陸奥（みちのく）の国であり、白河以北こそは、我が先祖が生きた土地だ。大阪から白河に行くたびに、また白河から大阪に戻るたびに不思議な気持ちになり、新幹線の中で幾度となく自分のルーツ、血、遺伝子について考えたりもした。

はじめて新白河駅に降り立った時に、まず気になったのは、駅前にぼつんとあった銅像だった。見れば芭蕉像で、『おくのほそ道』に収録されている「心許なき日かぞ重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定めぬ」の句が刻まれている。『おくのほそ道』の紀行は、元禄2年（1689）の江戸・隅田川の芭蕉庵の立出からはじま

るが、芭蕉の「旅心」が定まるのは、ここ、白河の関であったという。

芭蕉が生きた元禄時代の人間の寿命は短い。幸若舞の『敦盛』ではないが「人間五十年」と謳われ、実際に平均寿命は50歳もいかなかったという。白河を訪れたとき芭蕉は46歳の高齢であった。おそらく「心許なき日数」とは江戸から白河までの日数ではなくて、芭蕉の半生そのものの日数を意味するのではないだろうか。

そもそも『おくのほそ道』は芭蕉が心から敬愛した西行法師没後500回忌を偲んだものだった。陸奥（みちのく）の歌枕を巡りつつ、西行や宗祇といった歌の先人；死者たちの面影を追う鎮魂の旅。古代インド、仏教では人生を「学生期」「家住期」「林住期」「遊行期」とわけ、古代中国、儒教でも「青春」「朱夏」「白秋」「玄冬」とわけ。芭蕉は46歳にして、ついに「遊行期」「玄冬」に入ったのだろう。白河で、その旅心が定まった。死出の旅を覚悟した。

白河の城下町に入ると僕は方々を歩き回ったが、白河で、まず気になったのは寺院の多様性だった。聞けば白河の城下町には天台宗、真言宗、浄土宗、浄土真宗、日蓮宗、曹洞宗、臨済宗に、全国的には数が少なく珍しい黄檗宗に時宗の寺院まであるとか。これには非常に驚かされた。その理由として白河は江戸時代、7家21代も



の藩主の入れ替わりがあり、それに伴って藩主や武士の檀家寺が移設され、それが多彩な寺院の集積に繋がっているという。

白河は奥州街道沿いにあり、東北と関東を結ぶ重要な戦略拠点となる。そこに大藩を置いて勢力を保持されることは、幕府からすると、あまり望ましいことではなかったのだろう。特に白河以北には外様の大藩・伊達藩（我が先祖である）がいる。最も恐ろしい仮想敵のひとつで、結果として幕府は白河には信頼のおける譜代（榊原家、本多家、阿部家）や親藩（松平家）の藩主を置き、さらにそれを次々と変えていくという統治戦略をとった。その結果、いまでも白河の寺院では、日夜「南無阿彌陀仏」「南無大師遍照金剛」「南無妙法蓮華経」「南無釈迦牟尼仏」と、いろんな念仏、宝号、真言、題目が唱えられることとなった。まさにポリフォニック（多声性）な宗教都市ができあがったように思う。

宗旨・宗派の違いは、現代人の我々には、それほど強く意識されないが、江戸時代の人にとってみれば宗旨や宗派には、かなり強い帰属意識やアイデンティティがあったと思われる。「門徒もの知らず」「法華骨なし」「禅宗銭なし」「浄土情なし」といった他宗を揶揄する言葉があるが、地域によつては、宗旨・宗派の違いによつて深刻な対立や分断などもあった。白河はしかし、宗旨・宗派の違いなどを柔軟に受け止め、「いろんな宗教が

あつていい」という寛容の精神が培われたのではないだろうか。

この自分とは違う背景、バックボーンを持つ人間、「他者」への寛容性が白河にはあるように思う。また、これがじつは戊辰戦争時の戦死者を、東軍（奥羽越列藩同盟軍）・西軍（明治新政府軍）の分け隔てなく白河の町衆は懇ろに供養した…という「仁」の精神の抛り所になったのかも知れない。

白河と同じように街道沿いにあり、次々と藩主が変わった都市といえば、東海道の浜松藩がある。浜松も白河と同じように戦略上、重要な拠点であり、白河藩主は江戸時代で7家21代を数えるが、浜松藩主も12家22代に及んでいる。

藩主が次々に変わった地域というのは面白いもので、例えば、浜松人気質を表す言葉として「やらまいか」という方言がある。藩主が何度も何度も変わるの、町衆からすると、あてにならない。だから自分たち町衆自身で、なんでもやろうという気概があり、それを「やらまいか」（やってみようではないか）精神というらしい。

じつは、この「やらまいか」に似た精神性、スピリッツが、白河にもあると僕は感じている。とくに白河のまちなかにあるコミュニティ・カフェ「EMANON」は、そういう逞しい白河町衆スピリッツの現在進行形の姿ではないだろうか。高校生たちで企画し、取材し、執筆し、



編集しているというフリーペーパーの存在や、クラウドファンディングの成功、DIYによるゲストハウス運営など、見事という他はない。代表の青砥さんの企画力、行動力には脱帽だが、それを支える、見守る白河の町衆、大人たちの度量の大きさ、深さもあるだろう。

ちなみに、白河では僕はいろんな人に「浜松の『やらまいか』のような言葉、白河の人の気質を表すような言葉はないですか？」と聞いてみたが、そういった言葉や方言はあまり思いつかないといわれた。ただ白河では藩主・松平定信公が「士民共楽」といって南湖を整備したという話を聞いた。

南湖は、当時よく造られた大名庭園と違って、場所を仕切ったり、庭園を囲む柵などが設けられず、いつでも、誰でもが、自由に利用できる場所として、武士にも庶民にも開放されていたという。「士民共楽」というのは「武家と庶民が一緒になって共に楽しむ」という理念を表した言葉らしい。それで「士民共楽」は「松平定信公は平等主義で庶民にも娯楽を開放した」といった「名君のエピソード」として語られるようだが、僕の見立てでは、これは逆ではないか？と思う。つまり定信公が「士民共楽」と謳って、庶民を立てないといけないほど、庶民たちが武士に依存しない、独立心や気概、自主性をもっていったということの証明ではないか？と僕には感じられる。



白河藩に関していうと、現在の白河では、城と町のあいだに明治時代に鉄道（現・JR）が引かれ、それによつて「城」と「町」が分断されているのも気になった。また城の西側の会津町にあったという武家屋敷は現在、見事なまでに、ほぼ何も残っていない。

じつは幕末に藩主の阿部家は転封され、戊辰戦争時の白河は天領で、藩主がいなかったらしい。そういうことも影響してか、戊辰戦争後は、あつというまに武家屋敷は畑地になったそうで、いまでは完全に新興住宅地エリアとなっている。

日本全国の城下町では、武家屋敷が保存されて、またはわざわざ再建したりして、それを観光資源、誇りにしている都市もある。「藩主が長く君臨した」という都市ほど、そういった傾向があるように僕は感じているが、白河には、そうした傾向があまり感じられなかった。この武家屋敷への無関心さにも、ある意味、白河の町衆の自立性・自主性の強さを感じなくもない。

江戸時代、白河の城下町は約1万5000名ほどの都市であったとか。町人人口は約7500名。また武家屋敷の範囲、規模などから推測して、武士もほぼ町人と同数だったと推測されている。

中世、近世の頃の話だが「千軒は共過ぎ」という言葉

があった。「共過ぎ」は「友過ぎ」ともいう。集落、都市で、家が千軒もあれば、そこだけで、なにもかも循環して、生活や経済、文化、政治が成り立つという意味らしい。要するに「共に過ぐす」ことができる。また「友と過ぐす」ことができる。この友とは「顔が見える関係性」で、そうであるからこそ持続可能な、サステイナブルなコミュニティの自治的な都市が生まれる……ということだろう。江戸時代の1000軒であるから人口規模としては4000名ほどではないかと思われる。白河は約1万5000名で、「共（友）過ぎ千軒」の4倍はあったことになる。いかに白河が巨大な都市であったか。奥州街道の宿場町でもあるから、人々の往来も多かった。本陣、脇本陣、旅籠などが設けられ、遊郭もあった。とくに「白河の馬市」は全国から人が集まるほど有名であったという。

市場、商業の話といえば、江戸時代、白河の城下町の「通り五町」では毎月4日、5日、14日、19日、24日、29日の日に六斎市が開かれたという。この六斎市では、とくに年始めの市が「市神祭」と呼ばれて盛大に開催され、そこで縁起物として白河だるまなども売られた。

仏教由来の六斎日や、市神さまなど、商業行為に神仏への信仰がうかがえるのが面白い。中世、近世社会には、近代国民国家の名の下による製造物責任法も消費者契約

法もない。商人たちは旅商人や流れ者、どこから来たのかよくわからない「他者」が多い。所在や得体がわからない者ばかり。そういう有象無象の人間たちが集まってくる市で、どうやって商品の価値を保証するのか？担保するのか？それは神仏しかいなかった。神仏こそは「他者」であろうとなかろうと、人間の所業を何もかもお見通しであるので、その前では嘘をつけない。そんなことをすれば、たちまちのうちに神罰、仏罰が下される。神仏の前で詐欺や騙し行為をするほど、人間は強くなかった。だから、神仏の名の下に、他者たちは商品を提示し、値段を提示し、売買し、交換した。

六斎市や市神祭の後継が、現在の白河名物の「だるま市」であるという。だるまはご存じのように禅宗開祖の達磨大師に由来する。宗教と商業は、神仏と他者は、こういう形で結びつく。「だるま市」のような古くからの商行為、風習が、まだ色濃く白河に残っていることもユニークに感じる。これもまた「他者」を受け入れてきた都市の名残ではないだろうか。

白河だるまに関してはおもうひとつ興味深い話がある。じつは白河だるまは作りとしては関東地方のだるまの特徴と共通するらしいが、しかし「最初から目を入れる」という東北地方のだるまの特徴を持つとか。達磨といえ「石の上に三年」で、雪舟の絵「慧可断臂図」のように、



ずっと岩壁を睨み続けていた。東北だるまが最初から黒々とした目が入っているのは、その達磨の故事にあやかって睨みを利かして魔を追い払うという信仰に由来する。

だるまの購入者が、願掛けをして、成就したら目を描き入れるのは、実はあれは関東だるまの独特の風習で、幕末に疱瘡除けとして始まったものだ。戦後、国政選挙などで立候補者が当選すると支持者と共に万歳三唱して、その後に関東だるまに目玉を入れる……といった光景が頻繁にニュース番組などで見られるようになり、こうしたテレビの影響で、現在では白河だるまも関東だるま風に目がない状態で売られることが多くなった。関東マスメディアの偏向情報による悪しき地域文化破壊の典型といえるが、しかし本来は白河だるまには東北だるま風に黒々とした目が入っていた。

白河は「白河の関」があるように、やはり、ここは「東北文化圏」と「関東文化圏」の結節点となる都市だ。関東文化圏の特徴と東北文化圏の特徴を重ね持っている、ハイブリッドな白河だるまは、その象徴といえる。

また、こうした場所だから白河は戊辰戦争（白河戦争）の舞台となったのだろう。

白河戦争は、白河を語るのに外せない歴史的事件だが、いまま白河のあちらこちらの寺院や街角に、西軍、

東軍の供養墓が点在していて、芭蕉の句ではないが「兵どもが夢のあと」を思い起こさせる。交通の要衝である白河は東軍、西軍ともに重要な戦略ポイントで、白河争奪戦は3か月に及ぶ長期戦となった。これは会津戦争よりも長く、ある意味、戊辰戦争最大の激戦地は白河であったのかも知れない。いろんな物語が残されていて、そのひとつひとつに興味深いものを感じたが、何よりも僕が心惹かれたのは「白河踊り」の話であった。

白河戦争で、市中に夥しい戦死者が出たので、白河の町衆は、あちらこちらに墓を作り、供養をした。そのさいに白河の町衆は死者供養として盆踊りを行った。それを見ていた西軍が、その盆踊りを覚えて、故郷・長州に帰ってから「白河踊り」として伝え、それが今も残っているという。

ところが山口県の郷土史研究家・中原正男氏の調査では白河踊りに関する資料があまりない。どうも白河踊りは山口県では、あまり大つびらではなく、密かに、こっそりと伝えられていたらしい。なぜ密かに？と疑問に思うが、白河踊りを伝承した長州藩士たちは、戊辰戦争後にあまり出世しなかったらしい。

戊辰戦争に勝利した長州藩だが、明治以降は長州藩士の中で、激しい出世争いが行われた。負け組というのは負けたわけだから生存競争から脱落するが、勝ち組となると、今度は勝ち組同士で、より激しい生存競争が始ま

る。戊辰戦争に勝って恩給をもらったら御の字…という  
ような人たちは長州で細々と暮らし、さらに出世を求め  
て東京に出ていった藩士たちはほとんど勝ちあがって  
いった。その格差は広がる一方。山口県では今でも「東  
京出世組」と「長州逼塞組」というのがあるらしく、戊  
辰戦争には勝ったが隣村の出世同僚に比べたらオレなん  
て…というルサンチマンを抱えた人が少なくなかったと  
いう。そして白河踊りは、どうもこうした「長州逼塞組」  
の人たちが伝えたものらしく、だからあまり大つぴらに  
踊ったりはしなかったのではないかと。

あくまでも推測で、実際のところはよくわからない  
が、ありえないこともないだろう。敵に勝ったら勝った  
で、今度は醜い味方同士の出世争いが始まる。勝者は、  
常に、勝ち続けたいといけないという地獄。

ちなみに現在、白河には白河踊りという踊りはないら  
しい。盆踊りはあるが、これは近年に作られた近代盆踊  
りとか。長州の白河踊りが白河に里帰り(?)したら面  
白いかも知れない。

太平洋戦争の空襲はなく、戦後のモータリゼーション  
の影響もそれほど受けなかったのが、白河の都市の面白  
さでもある。江戸時代の古地図と、現在の地図を見比べ  
ても、ほぼまちのグラウンドデザインは変わっていない。  
また通り五町には、江戸時代から続く商家も多く、白河

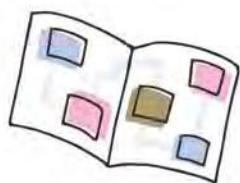
市が認定している「歴史的風致形成建造物」も多い。江  
戸時代の町割が、かなり維持されていて、それが白河を  
「歩ける都市」にしている。戦後のまちづくり、都市計  
画は、どうしても車を基軸に作られたところがあり、「歩  
ける都市」ではない。しかし、歩くことを基軸にまちを  
作らないと、僕はまちの物語、ナラティブが発動しない  
と考えている。

というのも、大抵の人は移動することを歩くと考えて  
いるようだが、僕は歩くというのは字義通り、「少し止  
まる」ことだと考えている。そう。「歩ける都市」とい  
うのは、「少し止まれる都市」だと言い換えてもいい。

ふらふらとまちを移動し、なにか気になるものがある  
り、「これはなんだろう?」と、ふと、足が立ち止まる。  
お店の人や、通りすがりの人に「はじめまして。これは  
一体、なんですか?」と尋ねたりすることができる。そ  
うすることで、あいさつが生まれ、対話が生まれ、交流  
が発生する。車の移動では、こういう時間や機会は発生  
しない。あまりにも速すぎて、急ぎすぎて、人と人が  
出会うということがない。歩くからこそ、「少し止まる」  
からこそ、「お互いの顔が見える」というような関係性  
が生まれてくる。そこから時には友情が生まれ、恋愛が  
生まれ、家族が生まれ、子どもが生まれ、人生がはじま  
る。まちの物語、ナラティブが発動する。そのためにも  
「少し止まる」ということが必要なのだ。

白河のまちにはそれがある。車社会以前に作られた城  
下町であるから、自然と歩くことを基軸にまちが形成さ  
れ、それが今でも息づいている。モータリゼーションに  
毒されていない。ヒューマンスケールであるというこ  
と。これは白河の最大の魅力だろうと思う。何度歩いて  
も、新しい発見があったし、新しい出会いがあった。僕  
は常に「他者」を発見した。そのたびに手持ちのスマホ  
で「他者」を撮影した。撮影枚数はなんと3000枚を  
超えた。

それらを編集して、遊ぶのがフォトスゴクだ。少し  
止まりながら、僕が発見した「他者」を「白河まち歩き  
フォトスゴク」のページで紹介したいと思う。



# まち歩き フォト スゴロク の 作り方

一人でまち歩きフォトスゴロクを作ることでもできますが、できれば複数人、チーム（2〜5人）で作ることを推奨します。いろんな人と一緒に作ることで、一人だけでは発見できない、まちの魅力を発見できるからです。以下は複数人、チームで作るさいの作り方を基準に説明します。



## 1

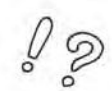
まず、まち歩きをしよう！



自宅、駅前、広場、公園、商店街、カフェ、役所、公民館、寺社仏閣など、どこでも構いません。まち歩きスタート地点にみんなで集まり、スマホやデジカメを片手にまちを歩きましょう。まち歩き時間は1時間ぐらいが目安ですが、30分でも、2時間でも、半日かけてもかまいません。またスタート（集合場所）とゴール（再集合場所）を決めて、まち歩き中は、基本的には一人で歩いてください。自由散策で、フラフラとまちを逍遥（無目的に歩くこと）してみましょう。

## 2

まち歩きをしながら「？」や「！」を撮影しよう！



まちを歩いていると、不思議なものや奇妙なもの、頭の中に「？」（ハテナマーク）が思い浮かぶもの、いっぱい見えてくると思います。そういった「なんだろう？」と思ったもの、気になったもの、興味関心が引かれたものをスマホやデジカメで撮影しましょう。また「なんだこれは！」「ビックリ！」「面白い！」「すごい！」と思うものも出てきます。そうした「！」（ビックリマーク）を感じたものも撮影しましょう。画像データは、まち歩きフォトスゴロク作成時にしり判サイズにプリントアウトしますが、ひとまずいろいろと撮影して、プリントアウトするときに、どの画像データを使うか取捨選択しましょう。まち歩きが終われば、再集合して、今度はスゴロク作りです！

## 3

撮影した画像をしり判写真にプリントアウトしよう！

スゴロク作りの会場（カフェ、セミナー会場、公民館など、どこでも構いません。テーブル、椅子などがある空間がいいでしょう）に移動して、まち歩きで撮影した「？」や「！」の画像データの中から、まち歩きスゴロクに使用したいと思う画像データを数枚（3〜5枚程度）選んで、しり判サイズ（89mm×127mm）にプリントアウトします。コンビニのマルチコピー機の写真プリントサービス（有料）を使うと簡単です。家庭用プリンター、業務用プリンターの場合、WordやExcelなどに画像データをしり判サイズにして貼りつけてA4コピー用紙でカラー印刷して、ハサミ、カッターなどで切りとるという方法でも構いません。

## 4

みんなに「？」や「！」の「写真」を紹介しよう！

チーム（2〜5人）でテーブルに座り、プリントアウトしたしり判写真をみんなに紹介していきます。「？」や「！」は、どの場所で撮影したのか？どのようなものか？なぜ気になったのか？どこがすごいと思ったのか？いろいろと写真を提示しながら、みんなと雑談してください。ただ写真を紹介して終わりではなくて、それを見て、みんなもどう思ったか？感じたか？気になったところなど話してみましよう。謎が解けたり、解けなかったり、さらに謎が増えたり、自分では気がつかなかったところに気がついたり、みんなと話し合うことで、またいろんな発見がでできます。

## 5

みんなのしり判写真と組み合わせ、ノートに貼り付けてスゴロクを作りましょう！

しり判写真の紹介や話し合いが終われば、それらを組み合わせ、まち歩きルートを作成し、ノートに貼りつけていきます。まずスタート地点から、どういうルートを通っていくか、写真のポイントに順番に辿り着くのか？をみんなで話しあいます。このときに地図などがあると便利です。写真の撮影場所をポイントイング（点をつける）して、それを繋げれば、まち歩きルートが自然とできあがります。まち歩きルートが決まれば、その順番通りに写真を「フォトマス」に貼りつけていきます。写真は縦、横どちらでも貼りつけられます。また写真を貼ると「フォトマス」に余白部分ができますが、その部分に写真の説明文、コメントなどを書き込みましよう。

## 6

コメントマスを書きこんでまち歩きフォトスゴロクを完成！遊んでみましょう！

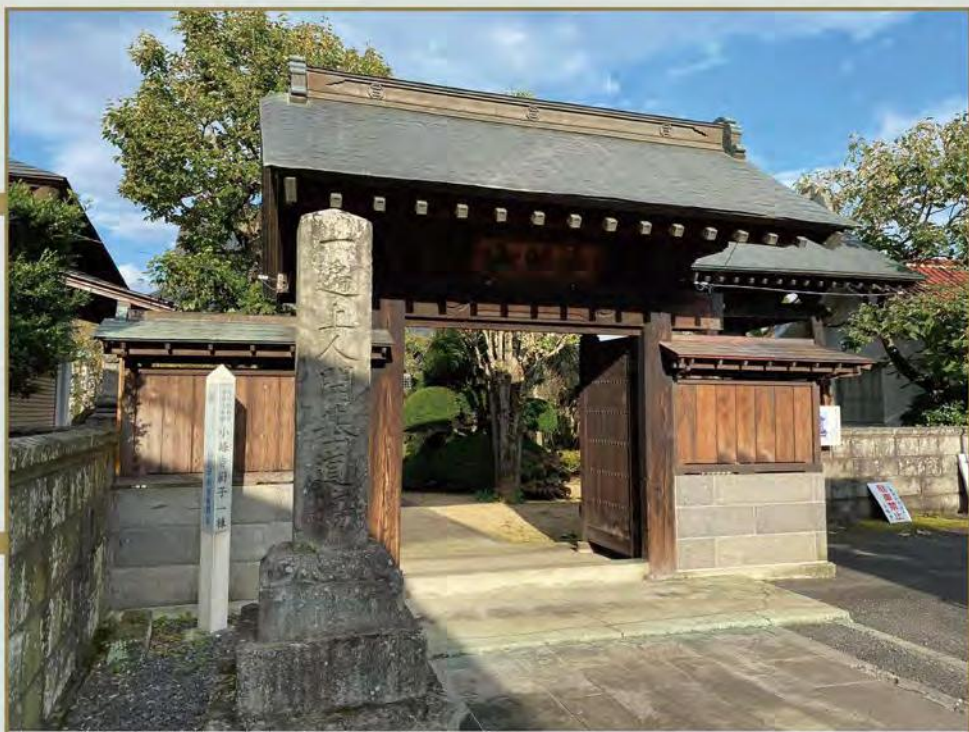
「フォトマス」と「コメントマス」のあいだに「コメントマス」を書き込んでください。これはまち歩き中の出来事やハプニング、感じたこと、思ったことなど、なんでも構いません。クイズを作ってもいいでしょう。自由に編集してください。コメントマスを書き込めばまち歩きフォトスゴロクは完成です。コマを作ってみると一緒に遊んでみましょう！

# まち歩き フォトスゴロクの 効果

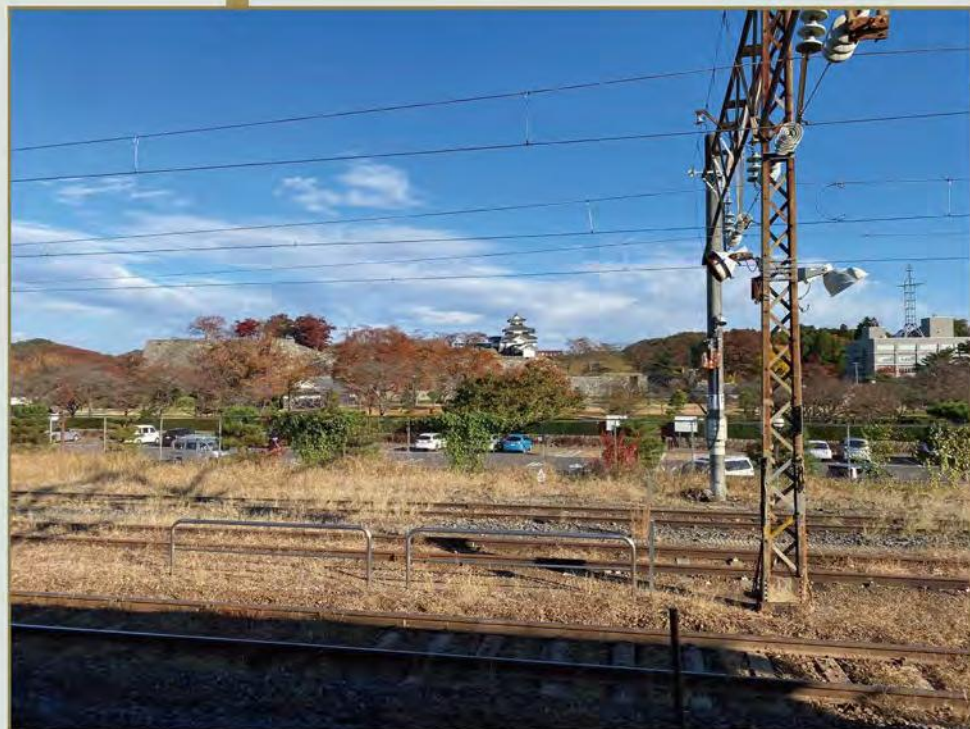
- 1 デジタルの「画像データ」ではなくて、あえてプリントアウトし、アナログの「しり判写真」を組み合わせて使うことで、「編集」の可能性に気づきます。「写真アルバムを作る」という面白さに似ています。
- 2 しり判写真を入口にするので「言葉」よりも「ビジュアル」優先になります。まちの面白さを言語的に説明するよりも、一枚の写真を見せることで、「百聞は一見に如かず」で面白さが伝わります。ビジュアルだから、参加者のまちへの興味関心がわかりやすくなり、それだけ参加者のハードル、敷居は下がります。
- 3 「なにを撮ってきたか？」によって、参加者の「まちへの視線」が可視化されます。まちのどこに興味関心があるのか？どういったところが気になったのか？がわかると同時に、他者の「まちへの視線」を共有することで、「そういう見方もあるのか」と、参加者同士で、まちへのリテラシーを深めていきます。
- 4 一人ではなく、複数人（他者）と、協働でのづくり（スゴロク作り）をすることで、集合的創造性=コレクティブ・クリエイティビティ（collective creativity）の場となります。
- 5 スゴロクを作るプロセスも面白いのですが、出来上がったスゴロクを他者に渡して実際に遊んでもらうと、他者のまちへの興味関心を引き出します。スゴロクを通して「こんなところがあるのか」「これは知らなかった」と、まち歩きフォトスゴロク作りに参加していなかった人にとっても新しいまちの魅力の発見に繋がります。

白河のお寺の数にビックリ！

ビックリした顔をする



白河で発見した小峰寺。なんと時宗のお寺。  
一遍上人が開基したとか。  
いっぺんはこなあきまへん！



駅から眺めた小峰城。  
JRで「城」と「町」が完全に分断されている。  
どういう経緯でここに駅ができたのか？非常に興味深い。

いきなり駅中の  
白河ラーメンを  
食べてしまう！  
美味！

1回やすみ

新幹線  
「やまびこ」  
に乗る！  
速い！

2 コマすすむ

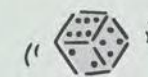
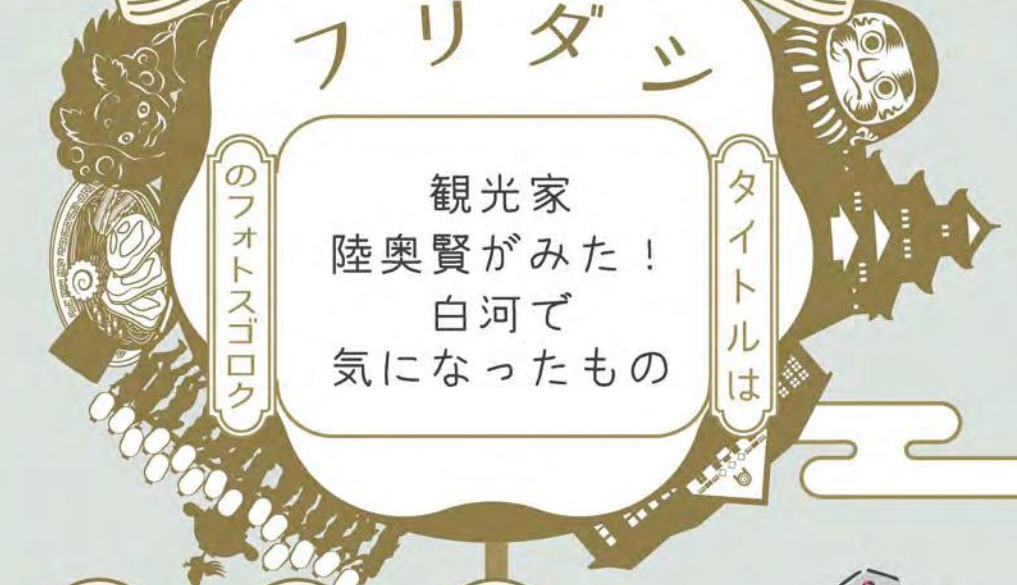
白河のまち歩きフォトスゴロク

フリダッ

観光家  
陸奥賢がみた！  
白河で  
気になったもの

のフォトスゴロク

タイトルは



新白河駅を降りるとすぐに芭蕉像。白河の関で作られた句が刻まれている。「駅から白河の関ってどれくらい？」と思って検索したら「徒歩で2時間半」と出て遠すぎてビビりました。



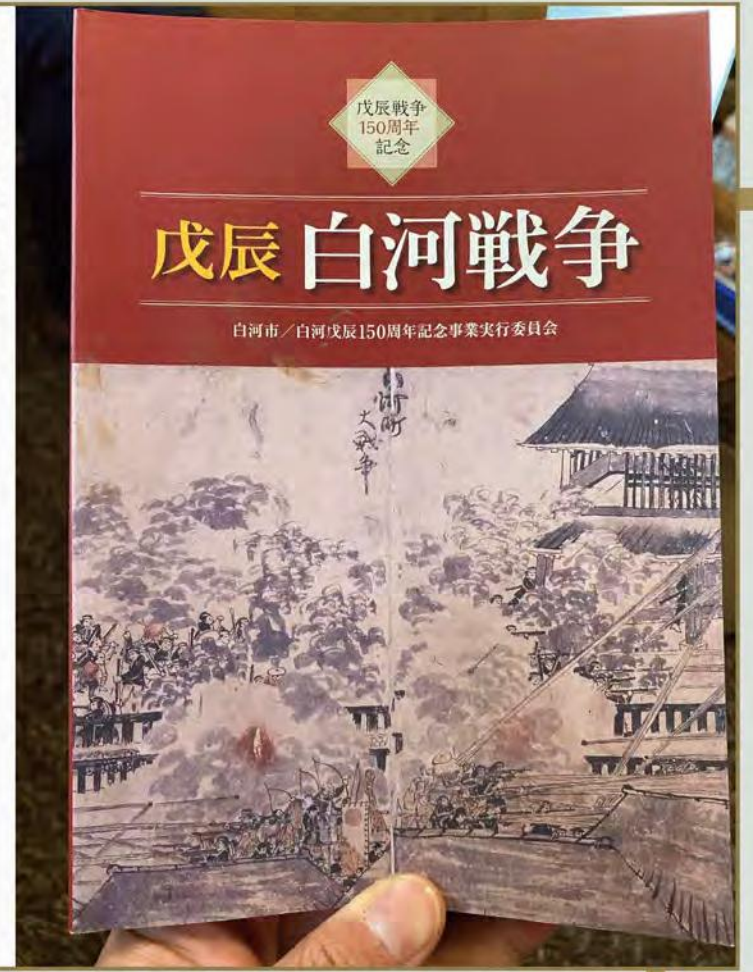
すべて国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する

全員で叫ぶ

聯芳寺にて。日本国憲法第25条「すべて国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する（生存権）」制定に尽力した司法大臣・鈴木義男（白河の大地主の出身）の顕彰碑。戊辰戦死者の供養碑「福島藩十四人碑」が目前にあり、考えさせられます。



中山義秀記念文学館にて  
戊辰白河戦争記念誌『戊辰白河戦争』。編集に携わった植村美洋さんからお話を聞きました。現在は、中山義秀記念文学館の館長ですが、じつはご先祖さまが戊辰白河戦争で戦ってます！ビックリ！



昭和26年創業という白河市本町の老舗「山田パン」さんの名物「シベリア」。エマンソンの青砥さんから「白河の高校生なら誰もが食べたことある」と聞いて食べました。美味。

気になるパン屋を  
発見！

1 コマすすむ



山口県の郷土史研究家・中原正男さんの『白河踊り』。じつは長州藩だけではなく、岐阜県の大垣藩にも伝わっているとか。いつか実際の現場を見たいものです。

野村屋の  
アイスを食べる！美味！

1回やすみ



# アガリ

エマノンで  
お茶をしながら  
白河のまち歩きを  
ふりかえる



よきかな  
よきかな



南堀切遺跡の土器。関東地方の特徴を持つ土器と、東北地方の特徴を持つ土器の2種類が出てくるとか。さすが白河。東北と関東のハイブリッドです！

白河市歴史民俗資料館にて



革籠原防壘。家康と天下分け目の合戦をしようと直江兼続が計画して、しかし家康は上杉討伐を中止して石田討伐で関ヶ原に。「幻の白河決戦」が行われていたら戊辰戦争以上に歴史が変わってたかも…？

親不孝橋で  
たそがれる

1回やすみ

クイズ！  
小原庄助を  
歌った民謡は  
なんという？

正解者は2コマ進む

天恩皇徳寺にある小原庄助墓。白河の人とは知りませんでした。戒名は「米汁吞了信士。辞世は「朝によし昼なほよし晩によし、飯前飯後その間もよし」。酒に生きた人生。羨ましいような、羨ましくないような…。」



フォトマス

白河市のまち歩きスゴロク

# フリダシ

のフォトスゴロク

タイトルは

コマすすむ

フォトマス

1回やすみ

フォトマス





フォトマス

フォトマス

フォトマス

フォトマス

コマすすむ

1回やすみ



アガリ

フォトマス

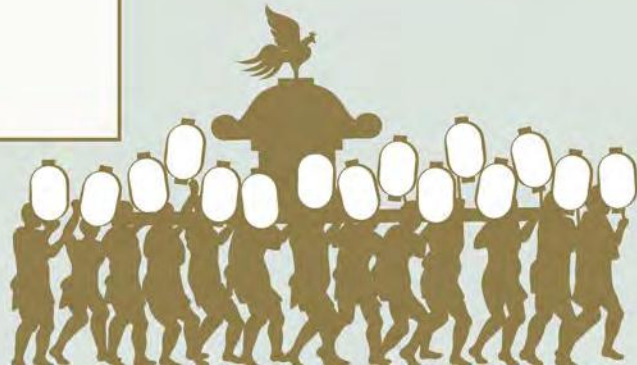
フォトマス

フォトマス

1回やすみ

よきかな

よきかな



フォトマス

白河市のまち歩きスゴロク

フリダッ

のフォトスゴロク

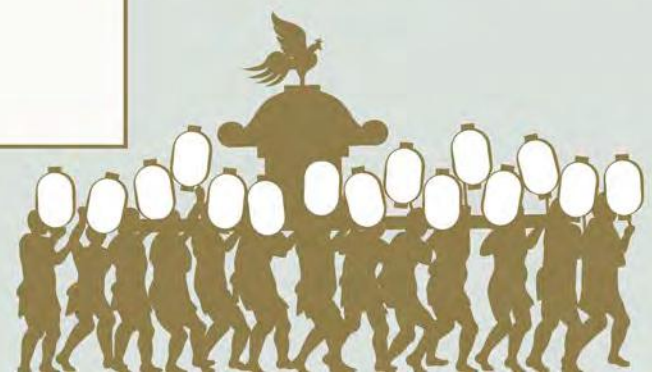
タイトルは

コマすすむ

フォトマス

1回やすみ

フォトマス



フォトマス

フォトマス

フォトマス

フォトマス

コマすすむ

1回やすみ



アガリ

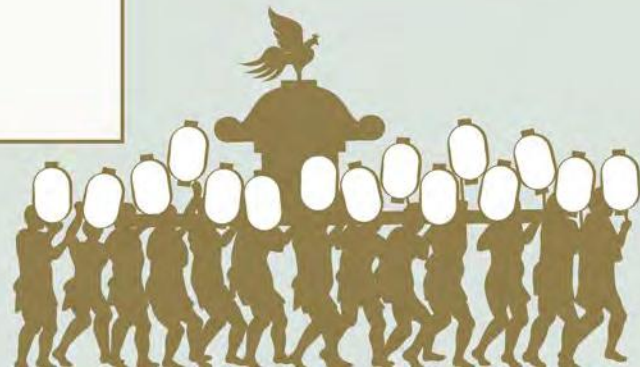
よきかな  
よきかな

フォトマス

フォトマス

1回やすみ

フォトマス





フォトマス

福島県のまち歩きフォトスゴロク

# フリダシ

のフォトスゴロク

タイトルは

コマすすむ

フォトマス

1回やすみ

フォトマス



フォトマス

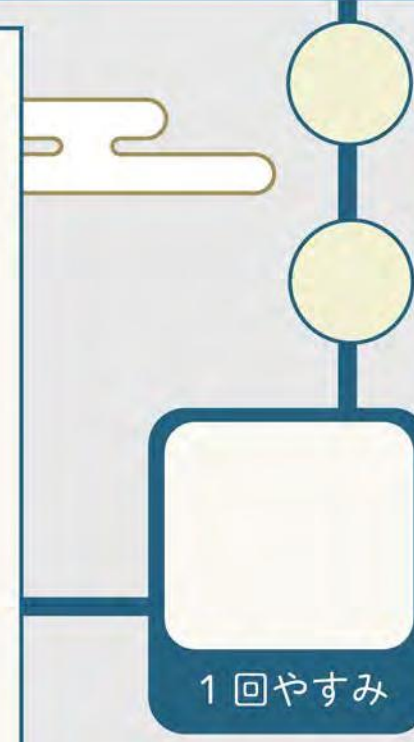
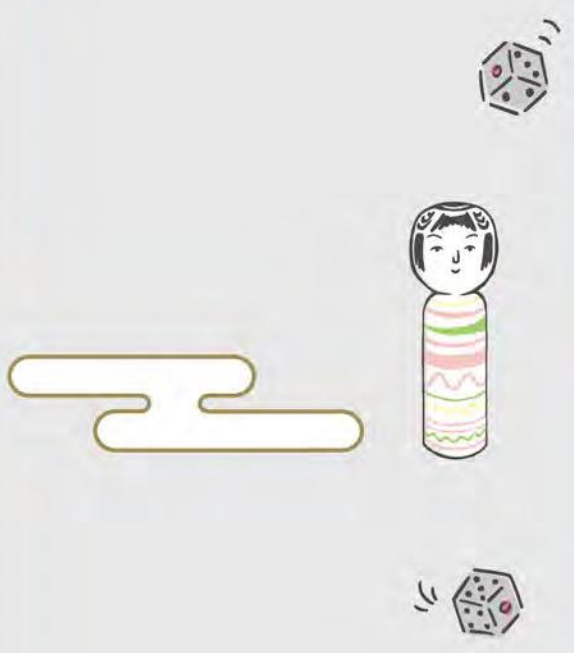
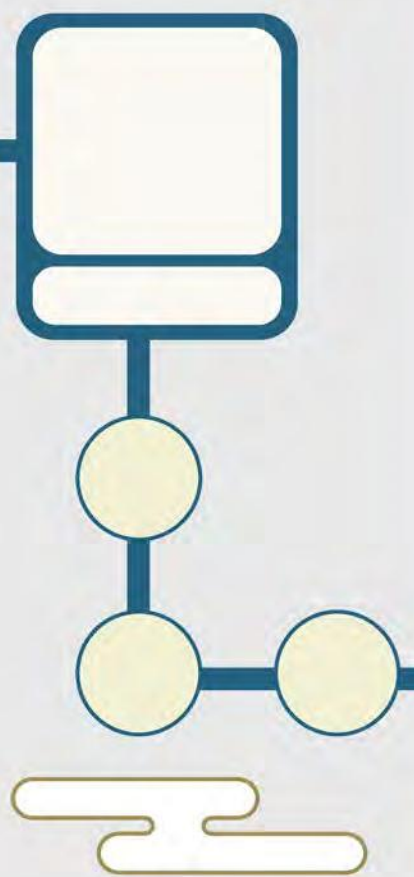
フォトマス

フォトマス

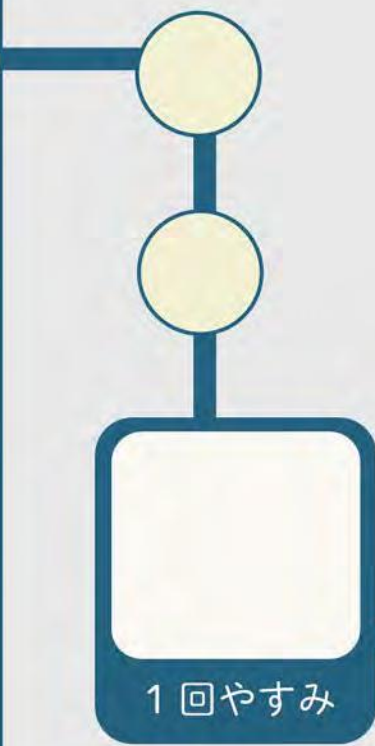
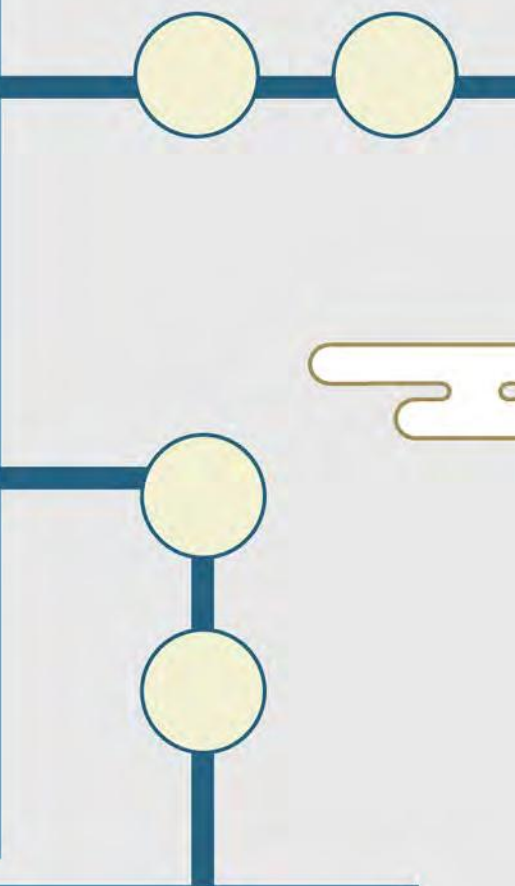
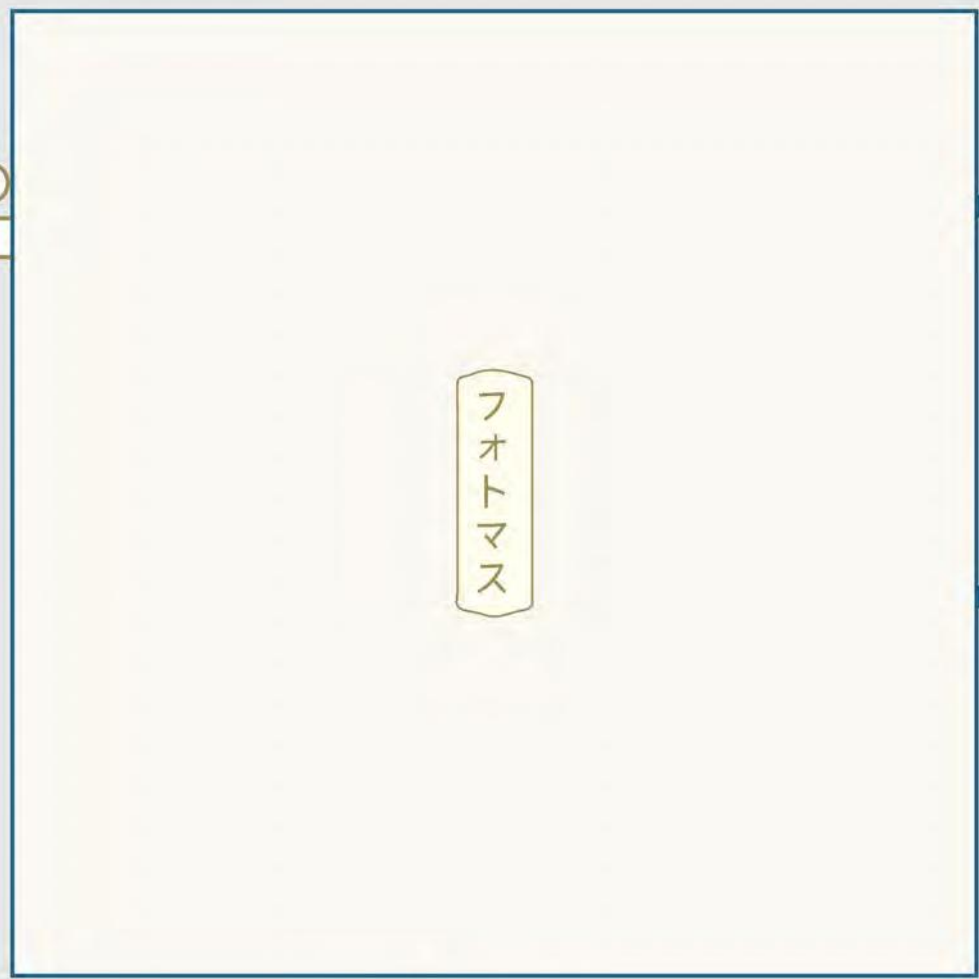
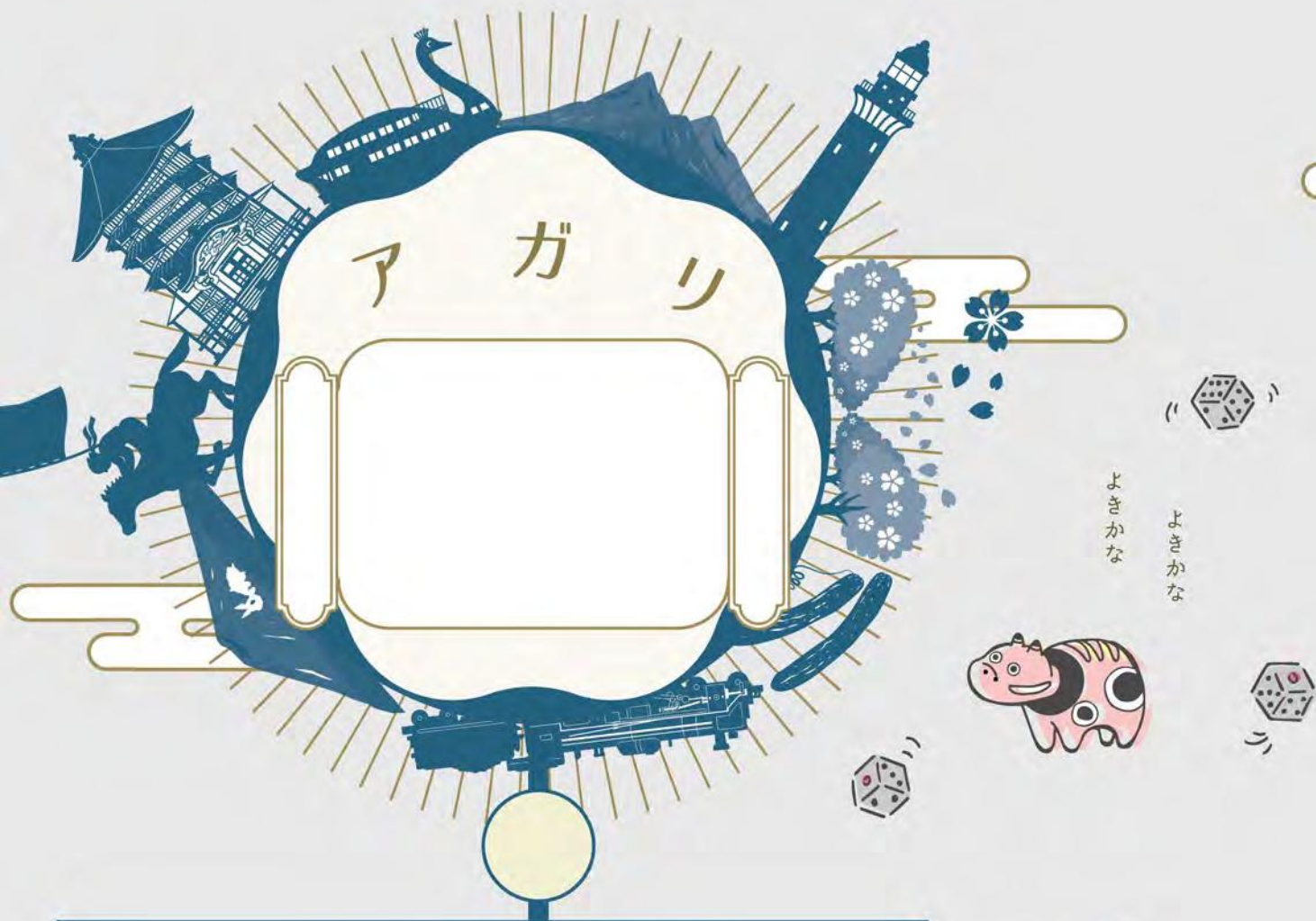
フォトマス

コマすすむ

1回やすみ







フォトマス

福島県のまち歩きフォトスゴロク

フリダシ

のフォトスゴロク

タイトルは

コマすすむ

フォトマス

1回やすみ

フォトマス



フォトマス

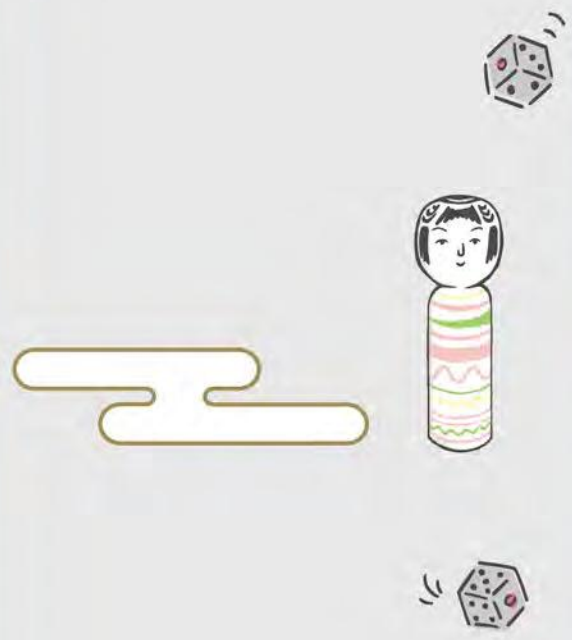
フォトマス

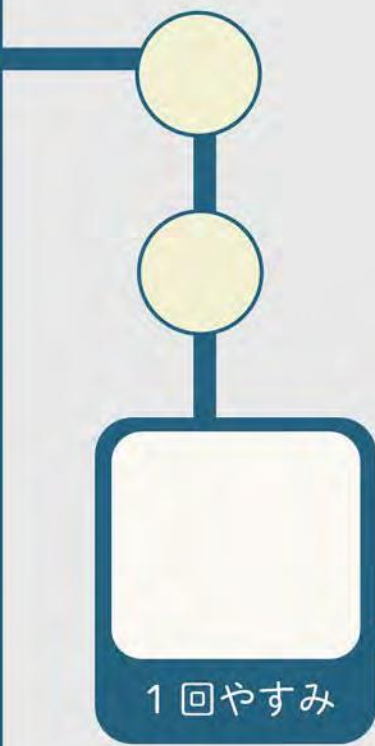
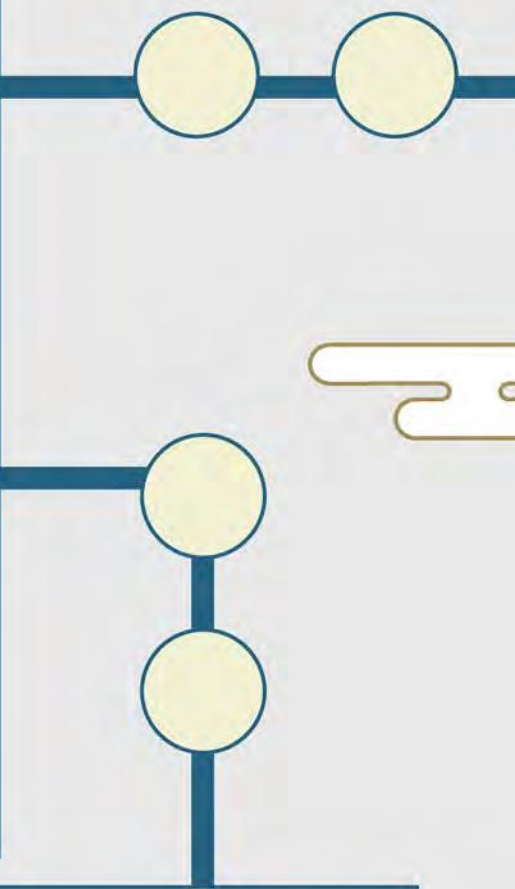
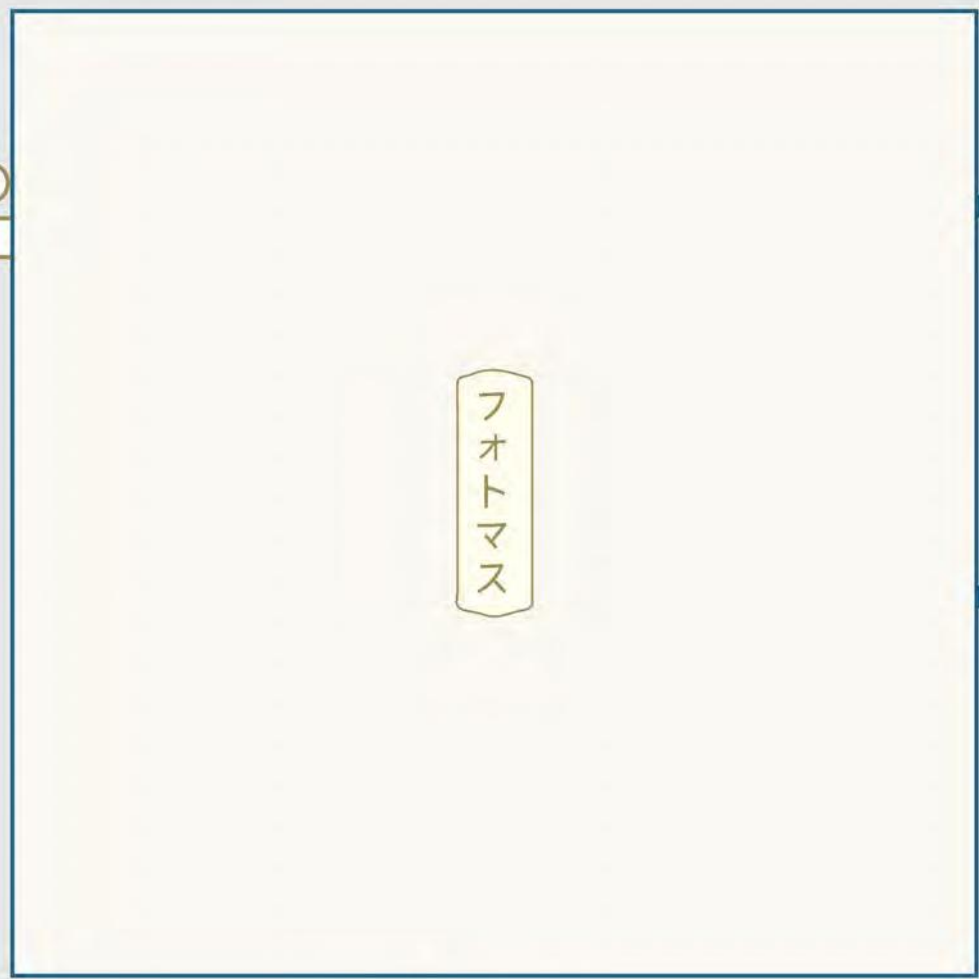
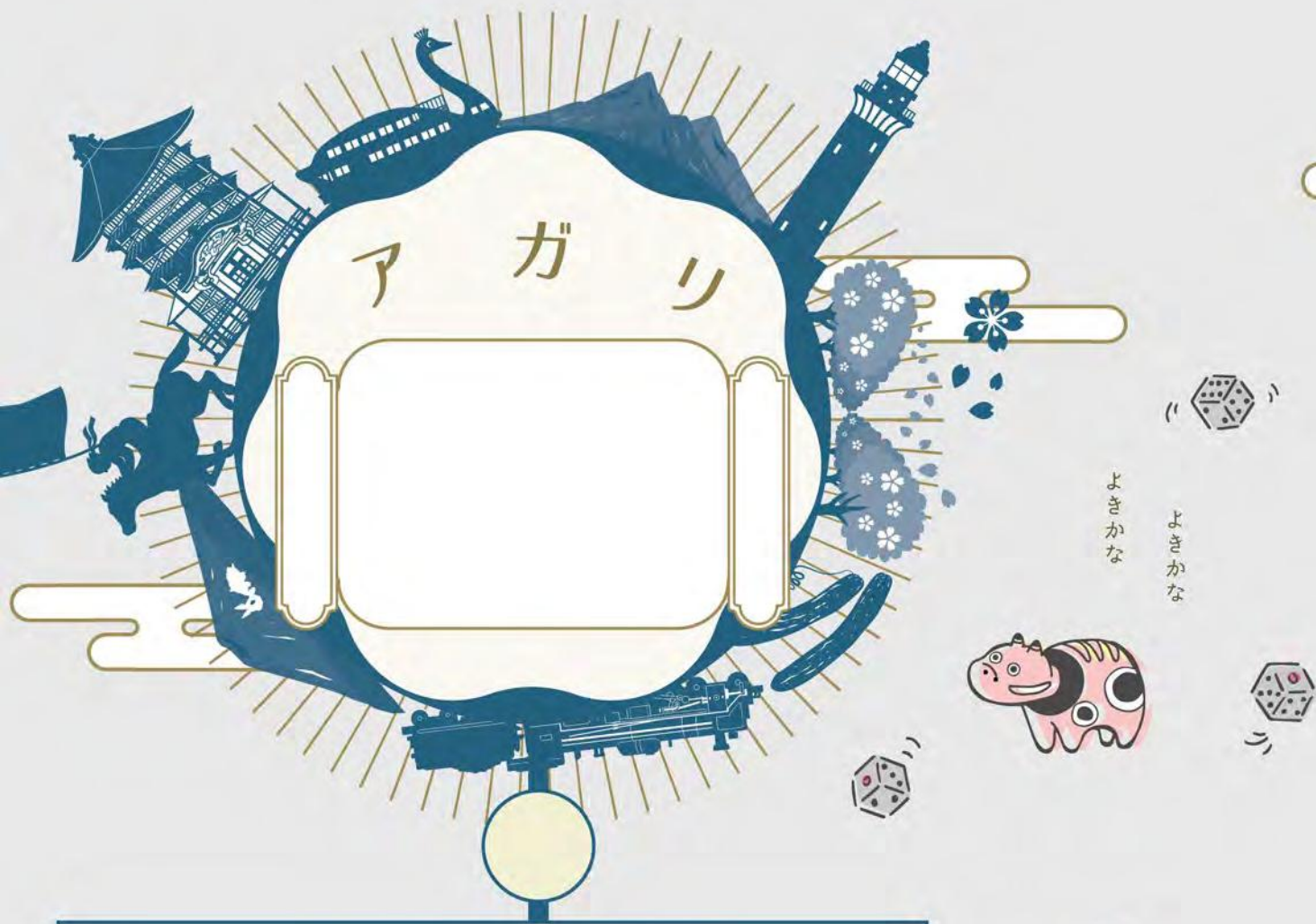
フォトマス

フォトマス

コマすすむ

1回やすみ





フォトマス

福島県のまち歩きフォトスゴロク

フリダシ

のフォトスゴロク

タイトルは

コマすすむ

フォトマス

1回やすみ

フォトマス



フォトマス

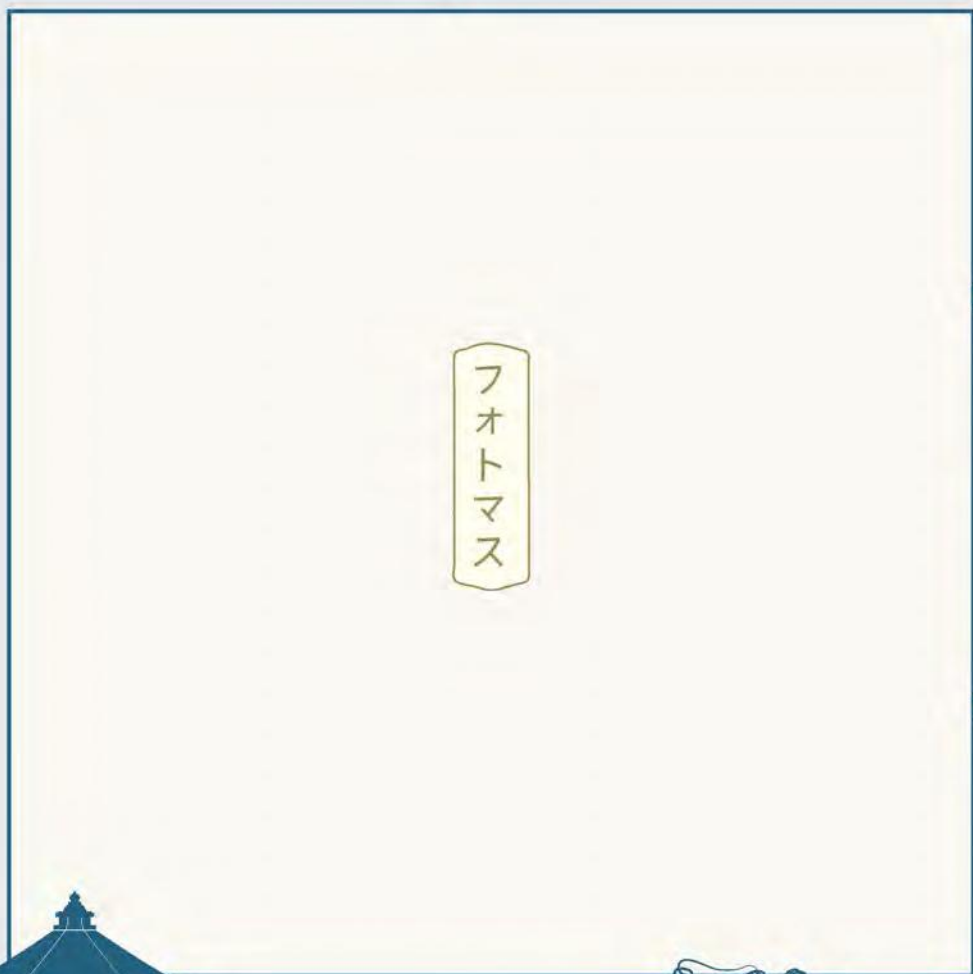
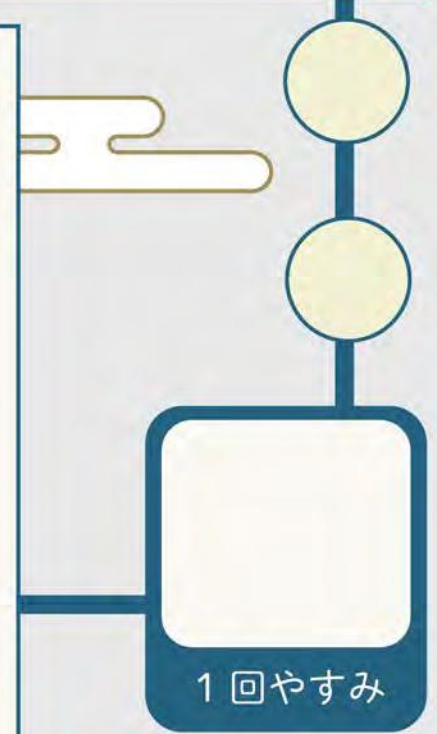
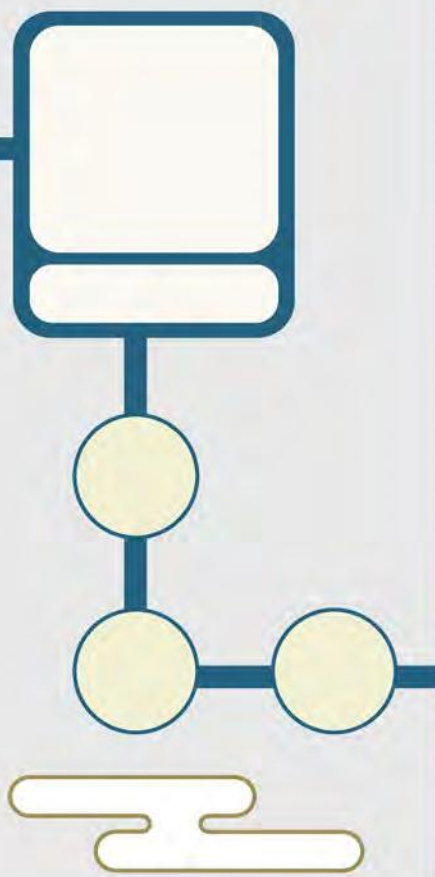
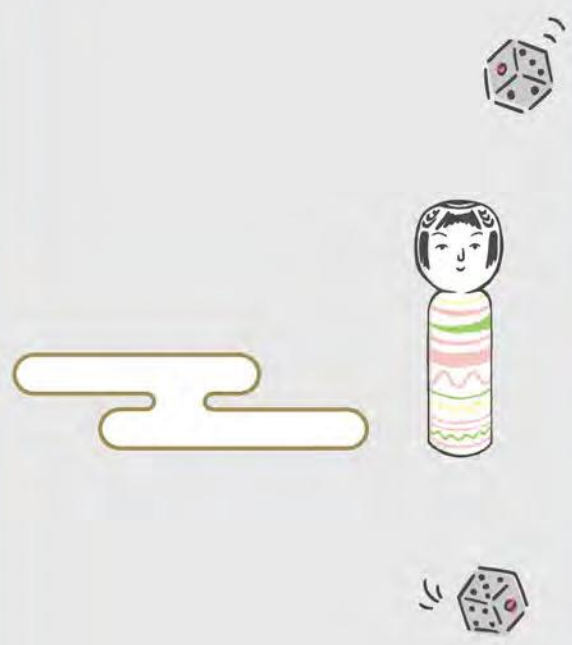
フォトマス

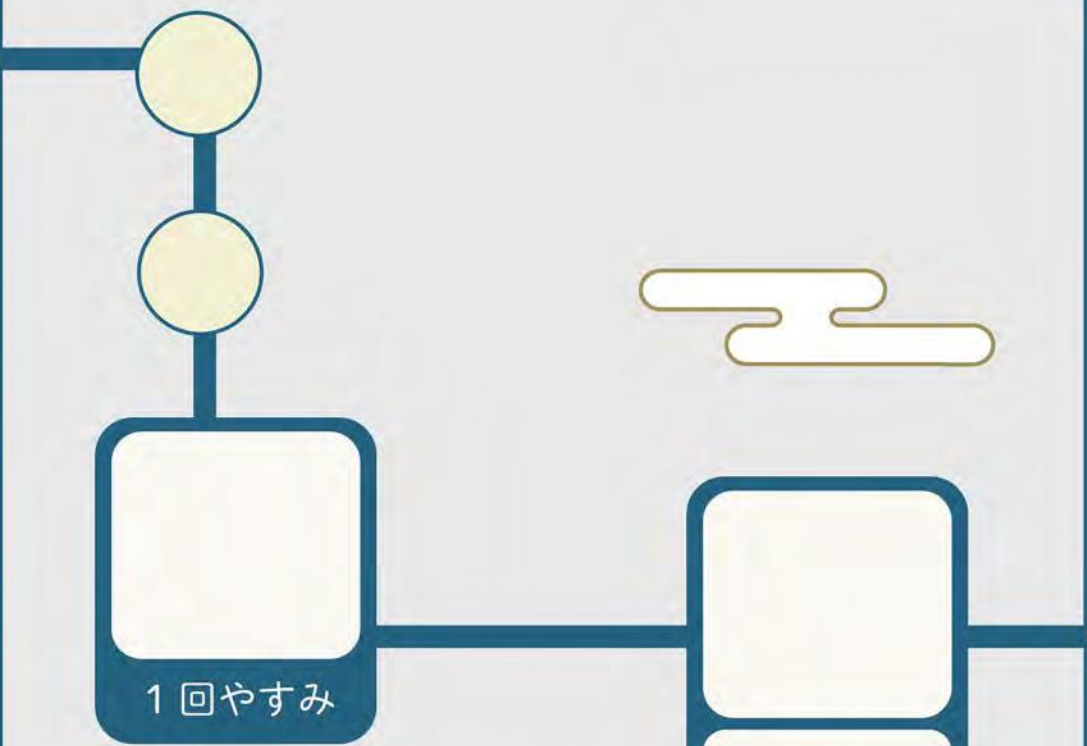
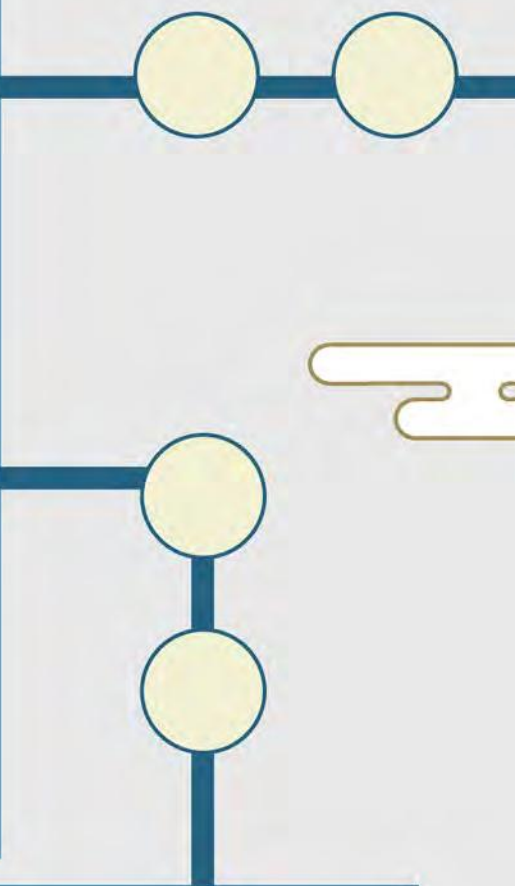
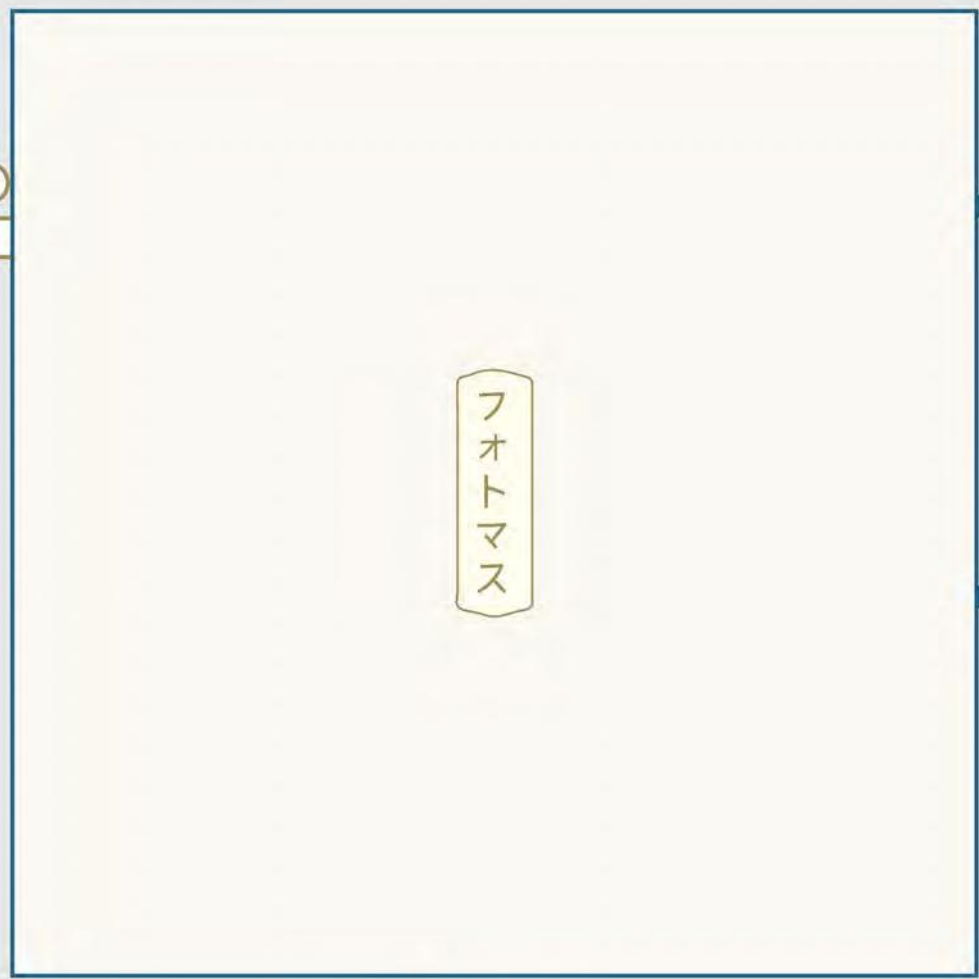
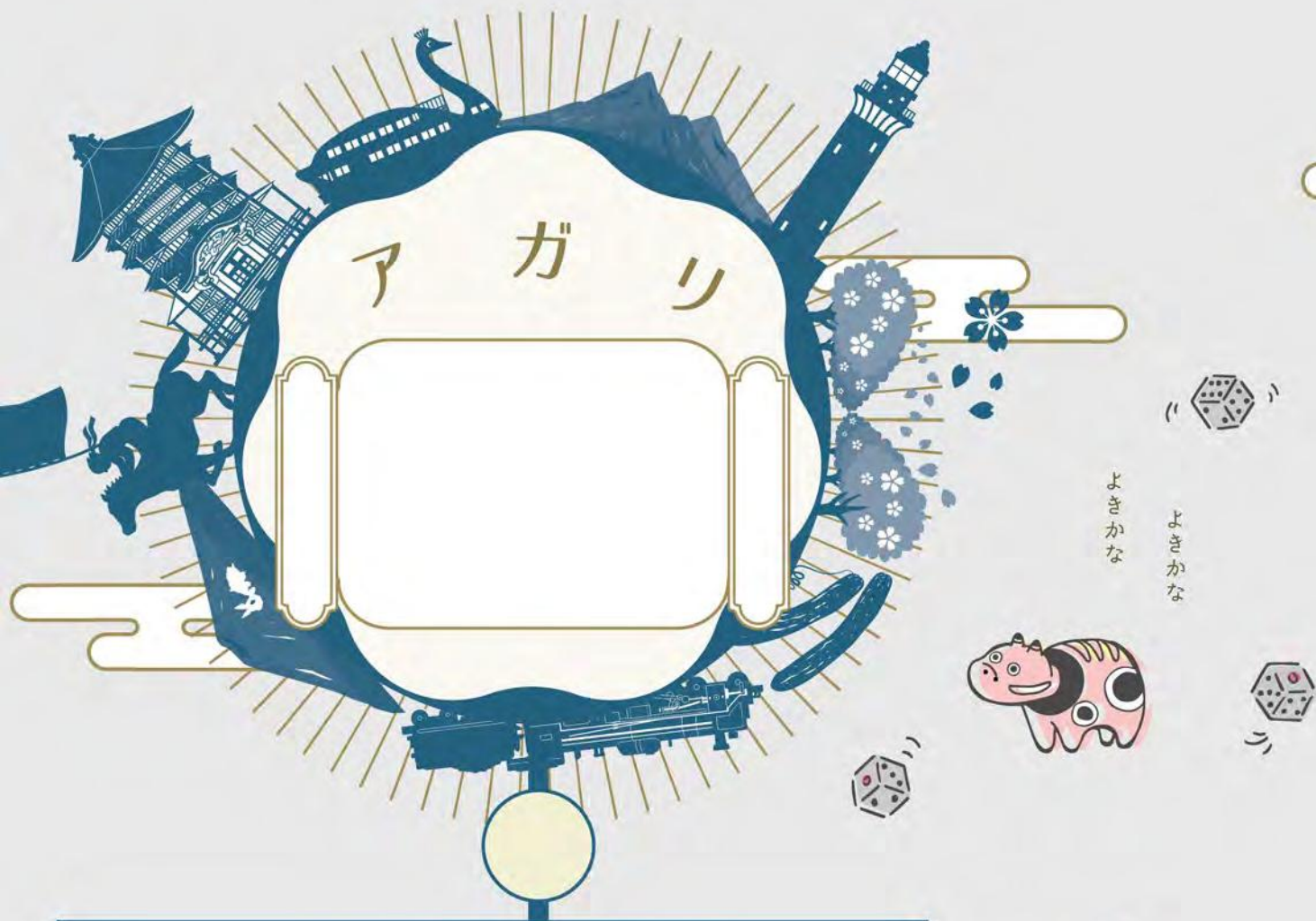
フォトマス

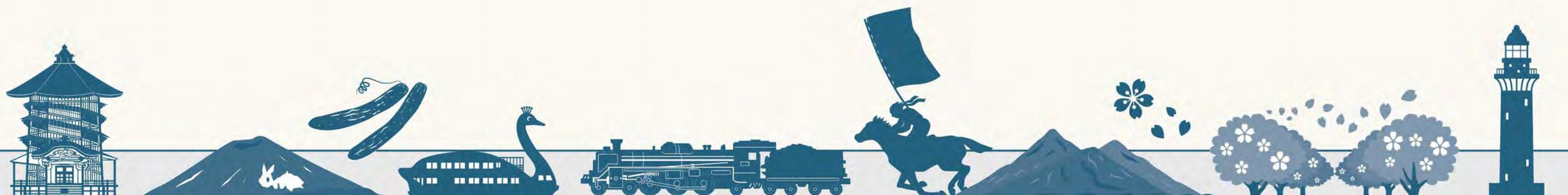
フォトマス

コマすすむ

1回やすみ









あなたの暮らすまちは、  
どんなまちですか？



## 謝辞

本事業の実施にあたっては多くの方のご協力を賜りました。  
趣旨に賛同くださったみなさま、応援してくださったみなさま、  
多くの学びを与えてくださったみなさまに、  
心より感謝申し上げます。

## ポリフォニックミュージアムとは

ライフミュージアムネットワーク実行委員会はこれまで培ってきたネットワークを基盤として、令和3年度より新たにポリフォニックミュージアムを立ち上げました。これはICOM京都大会で提案された「過去と未来についての批判的な対話のための民主化を促す包摂的で様々な声に耳を傾ける空間（ポリフォニックスペース polyphonic spaces）」を各地に創出するための福島県立博物館の試みでもあります。

令和3年度は各地域固有の歴史文化の再認識・再発見と、そこから立ち上がる課題への向き合い方の考察、その先にある未来像の創出を通して、ミュージアム的な場を多様に展開することにより、持続可能な地域社会への貢献を目指しました。

---

文化庁令和3年度地域と共働した博物館創造活動支援事業  
ポリフォニックミュージアム  
アートワークショップ「白河まち歩きフォトスゴロクを作ろう！」

## 福島 白河バージョン まち歩きフォトスゴロクノート

編集 陸奥賢、藤城光、川延安直、小林めぐみ、筑波匡介、山本俊、塚本麻衣子

デザイン 藤城光

撮影 陸奥賢、西間木大、筑波匡介、山本俊

印刷 北斗印刷株式会社

発行 ライフミュージアムネットワーク実行委員会  
〒965-0807 福島県会津若松市城東町 1-25（福島県立博物館内）



POLYPHONIC  
MUSEUM

